

令和3年度8020公募研究報告書抄録（採択番号：21-02-06）

研究課題：インプラント治療は高齢者の口腔機能を改善し認知機能を維持させるか？

研究者名：中川晋輔¹⁾，黒崎陽子^{1, 2)}，大野 彩^{1, 2)}，三野卓哉³⁾，荒川 光⁴⁾，小山絵理¹⁾，逢坂 卓¹⁾，水口 一¹⁾，大野充昭^{1, 5)}，前川賢治³⁾；口腔インプラント学会研究推進委員会：窪木拓男³⁾，會田英紀⁶⁾，澤瀬 隆⁷⁾，鮎川保則⁸⁾，秋山謙太郎¹⁾，大島正充⁹⁾，佐藤祐二¹⁰⁾，佐藤洋平¹¹⁾，廣安一彦¹²⁾，山田陽一¹³⁾，阪本貴司¹⁴⁾，宮崎 隆^{10, 15)}

所属：¹⁾岡山大学病院 歯科・口腔インプラント科部門，²⁾岡山大学病院 新医療研究開発センター，³⁾岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 インプラント再生補綴学分野，⁴⁾岡山大学歯学部（臨床准教授），⁵⁾岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 分子医化学分野，⁶⁾北海道医療大学歯学部 高齢者・有病者歯科学分野，⁷⁾長崎大学 大学院医歯薬学総合研究科 口腔インプラント学分野，⁸⁾九州大学歯学研究院 インプラント・義歯補綴科，⁹⁾徳島大学大学院医歯薬学研究部 顎機能咬合再建学分野，¹⁰⁾昭和大学歯学部 高齢者歯科学講座，¹¹⁾鶴見大学歯学部 有床義歯補綴学講座，¹²⁾日本歯科大学新潟生命歯学部 口腔インプラント科，¹³⁾大阪歯科大学 口腔インプラント学講座，¹⁴⁾口腔インプラント学会（学術担当常務理事），¹⁵⁾口腔インプラント学会（理事長）

【目的】口腔インプラント治療が，他の補綴治療と比較して口腔関連 QOL にどのような影響を及ぼすかは徐々に明らかになってきたが，本治療の経過期間中の認知機能の変化を評価した報告は少ない。本研究では，口腔インプラントもしくはブリッジ，床義歯治療を受けた患者を対象に，治療前，治療直後および治療1年後の口腔関連 QOL を測定し，治療直後の口腔関連 QOL 変化を比較するとともに，各種治療によって機能回復を図った患者の歯の残存状況ならびにトラブルの発生状況や認知機能低下の兆候の有無を明らかにすることとした。

【方法】目的対象454名のうち，治療直後の質問票が回収できなかった56名を除外した398名（平均年齢59.6±14.0歳，男/女：135/263名，口腔インプラント/ブリッジ/床義歯群：75/192/135名）を追跡対象とし，さらに治療1年後の調査が実施できなかった68名を除外した330名（平均年齢61.0±12.8歳，男/女：105/225名，口腔インプラント/ブリッジ/床義歯群：62/156/112名）を解析対象とした。治療法別の解析対象の治療前，治療直後および治療1年後の口腔関連 QOL 得点の比較には Steel-Dwass 検定を用いた。対象補綴装置の累積生存率は Kaplan-Meier 法を用いて算出し，Log-rank 検定を用いて治療法別に比較した。本研究は岡山大学大学院医歯薬学総合研究科疫学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号628）。

【結果】口腔インプラント群，ブリッジ群，床義歯群のいずれにおいても，治療直後の口腔関連 QOL は治療1年後も維持されていた（口腔インプラント群：治療直後 vs 治療1年後：p=0.72，ブリッジ群：治療直後 vs 治療1年後：p=0.19，床義歯群：治療直後 vs 治療1年後：p=0.95）。対象補綴装置の1年累積生存率を比較した結果，口腔インプラント群で98.4%，ブリッジ群で98.7%，床義歯群で85.7%であった。また，治療終了後に認知症関連兆候を示した対象はいずれの治療法においても認められなかった。

【結論】いずれの治療法においても治療直後の口腔関連 QOL は治療1年後も維持されていることが示唆された。また，認知症関連徴候を認めた患者はどの治療群においても認められなかった。